

令和5年度 教育事業（「地域の実情を踏まえた体験活動事業」（特色化事業））

OZUチャレンジプログラム

1 事業概要

国立大洲青少年交流の家において中心的なプログラムであるカヌーと既存のプログラムを合わせて、教育テーマである「やり抜く力の育成」を目指した教育事業である。今年度はカヌーとそれぞれの回でクライミング、オリエンテーリング、レクリエーションを実施するとともに、愛媛大学教育学部の日野教授に講師を依頼し、効果的なプログラムや指導法について検証を行った。



2 事業の目的（ねらい）

体験活動を通して、困難なことにも積極的に挑戦する姿勢を養い、「やり抜く力」の育成を図る。

3 企画のポイント

今年度は昨年度のカヌーに特化した事業である「チャレンジカヌーツーリング」から内容を変更し、研修支援で活用されること、昨年度からの課題であった「コミュニケーション力」の育成を念頭にカヌーだけでなく既存のプログラムも組み合わせた。さらに、今年度は講師の日野教授に助言をいただきながら、指導の際に、コミュニケーション力を高めるための工夫を行った。また、事業を通して参加者の変容を見るために、昨年引き続き、事前・事後（直後と1か月後）アンケートを作成し、事業実施による効果の検証を行った。

- 4 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
- 5 後援 愛媛県教育委員会・大洲市教育委員会・大洲市カヌー協会
- 6 期日 1回目 7月16日（日） [クライミング × カヌー]
2回目 8月6日（日） [オリエンテーリング × カヌー]
3回目 8月20日（日） [レクリエーションゲーム × カヌー]
- 7 場所 国立大洲青少年交流の家
愛媛県大洲市肱川
- 8 対象 小学5・6年生・中学生の親子
- 9 参加者数 1回目：14組30名
2回目：14組29名
3回目：15組32名
※全体応募者数 106組230名
- 10 参加費 1回目・・・1,190円
2回目・・・1,100円
3回目・・・1,060円
- 11 講師 愛媛大学教育学部 教授 日野 克博 氏
大洲市カヌー協会会員
国立大洲青少年交流の家職員

12 日 程

- 8:50 受付
- 9:10 開会式・アイスブレイク（仲間づくり）
- 10:00 チャレンジプログラム①
 - 1回目 7月16日 クライミング
 - 2回目 8月6日 オリエンテーリング
 - 3回目 8月20日 レクリエーションゲーム
- 12:00 昼食・休憩・更衣
- 13:00 移動（バス）
- 10:00 チャレンジプログラム② カヌー（平水版・ミニツアーリング）
- 16:30 移動（バス）・閉会式
- 17:00 更衣・解散

13 活動内容

（1）開会式・アイスブレイク

各回において、日程や事業のキーワードである「やり抜く力」について説明した。さらに、実施の直前と直後、1か月後にアンケートをとることを参加者に伝え、協力を呼び掛けた。開会式後は、全体でアイスブレイクを行ったり班ごとで自己紹介をしたりして、緊張をほぐした。それぞれの目標（頑張ること）を共有し合うことで、コミュニケーションを取り合う場を設定した。さらに、「ポジティブワード」や「ワクワクジェスチャー」といったキーワードを紹介し、コミュニケーションを取ることが活発になるよう促した。

（2）チャレンジプログラム①

（クライミング・オリエンテーション・レクリエーションゲーム）

1回目は、宇和島山岳会の方を講師として招き、クライミングや体育館での屋内ボルダーに挑戦した。子供たちは高い壁に驚きながらも何度も挑戦する姿が見られた。上れた高さをスタッフに伝えるなど自分自身で設定した目標を意識しながらチャレンジすることができていた。また、保護者も子供たちを応援しながら、自らも挑戦して充実した表情が見られた。

2回目では研修指導員の協力を得て、オリエンテーリングに挑戦した。子供たちだけで班を構成し、どのようにポイントを巡るかといった相談を子供たち同士でしやすいようにした。学年の違いはあったが、それぞれの班で「どのような順路を選択するか。」などを相談しながらポイントを見つけようとする姿が見られ、よくコミュニケーションをとることができていた。

3回目では職員によるレクリエーションゲームを実施した。ウブンツカードを用いるなど、お互いにコミュニケーションをとりながら楽しむことのできる内容を設定した。子供同士、すぐに打ち解けるとともに多くの笑顔が見られ、時折歓声も聞かれた。また、保護者が参加する活動もとり入れ、親子で楽しむ場面も見られた。



(3) チャレンジプログラム② (カヌー)

バスで艇庫に移動し、バディで協力しながらカヌーを運んだ。一人一艇のカヌーを使用するので各バディが艇庫から河原までを2往復した。その際もバディ同士で言葉を掛け合い、カヌーを運ぶことができていた。河原でライフジャケットを着用し、熱中症予防のために手首・足首を水につけたり水に浮かんだりした。そして、パドル練習を行い、カヌーの乗り降りや転覆した際の対処方法の説明を聞いた。その後、実際にカヌーに乗り、参加者は肱川でのカヌーの活動を楽しんだ。一部の子供たちはバディと一緒に目標地点を決めこぎ進めるなど、バディを意識する様子も見られた。後半ではミニツーリングを行い、鶯飼レストプラザ周辺までこいだ。全ての日程において、とても気温が高かったが、バディ同士や親子同士で言葉を掛けながら楽しみながら最後までやり抜くことができていた。その後は準備同様、バディで協力して片付けを行った。参加者は疲れている様子ではあったが、最後まで協力してカヌーを片付ける姿が見られた。



(4) 閉会式

交流の家に戻って班での振り返りとアンケートの記入を行った。各班での振り返りでは、個人の目標が達成できたかどうか、一人ずつ発表する時間を設けた。参加者同士、お互いの発表に真剣に耳を傾け、がんばったことを全員で共有できる時間となった。また、多くの参加者が楽しそうな表情をして帰路についていったのが印象的だった。



14 参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

【事業満足度】 (大人 44名 子供 46名)

*満足 : 84.4% *やや満足 : 15.6% *やや不満 : 0.0% *不満 : 0.0%

【直後の感想】

- 普段できない体験がたくさんできた。(子供)
 - みんなと協力できて、あきらめず最後までがんばった。(子供)
 - カヌーを運ぶのは大人でも大変だったが、お友達と協力してがんばれていた。(保護者)
 - やり抜く力は1人ではなかなか高まらないが、仲間がいると達成しやすい。(保護者)
- 他にも以下のように以前親子でカヌー事業に参加した経験があり、その際の子供の様子と比較して成長を感じているコメントも見られた。
- 2年前はカヌーを運ぶのをあきらめていたが、今回は最後までがんばれた。(保護者)
 - 昨年より、カヌーを運ぶこと片付けることを積極的にできていた。(保護者)

【1か月後の感想】

- いつもはすぐ諦めるところで、少しでもやってみようと思えるようになった。(子供)
- 友達などがどう言う気持ちなのかを考えながらコミュニケーションをするようになった。(子供)
- 友達作りに積極的になれている。また、勉強やスポーツでも「絶対無理、できん。」という発言が少なくなったように思う。(保護者)
- やったことがないことでも挑戦してみようと以前より前向きに取り組めるようになったと思う。(保護者)

15 事業の成果

昨年度に引き続き、やり抜く力の向上を調査するため、Grit調査*を行った。表1では、Grit調査の質問項目1から4において、実施直後の数値（3回の平均値）が実施直前よりも上がっている。事業に参加したことで「やり抜く力」が向上したものと考えられる。なお、より客観的なデータの収集を目的として、保護者にも同様のアンケートをとった。保護者の結果も併せて以下に示す。

*藤原寿幸氏・河村茂雄氏の「小学生のGrit(やり抜く力)とパーソナリティとの関連」（日本教育心理学会第62回総会発表論文集（2020年））を参考にした。

Grit調査 質問1~4の子供と保護者の回答変化（平均）	子供			保護者		
	直前	直後	変容	直前	直後	変容
1. 自分（子供）はがんびりやである。	2.72	2.93	+0.21	3.13	3.33	+0.22
2. 自分（子供）はどんなことにも一生けん命に取り組む。	2.89	3.33	+0.44	3.08	3.22	+0.14
3. 自分（子供）はむずかしいことやつらいことにも負けない。	2.68	3.07	+0.39	2.85	3.00	+0.15
4. 自分（子供）は始めたことはどんなことでも最後までやる。	2.96	3.26	+0.30	2.64	2.88	+0.24

今年度は、やり抜く力、特に課題であったコミュニケーション力を高めるための指導法やプログラムの開発を目指して取り組んだ。今年度複数の活動プログラムを組み合わせるなどの変更をしたが、表2が示すように昨年度と比べ数値に多少の差はあるが、「やり抜く力」の向上に一定の成果があった。コミュニケーション力についても他の項目に比べて、数値がやや低かったが、昨年度に比べ大きく向上しており、今年度取り組んだプログラム及び指導上の工夫が有効であったと考えられる。

表2 やり抜く力の構成要素に関する質問への回答（3回の平均） ※ [] 内はR4の数値

	協働力	コミュニケーション力	チャレンジ力	安全対応力	実践力	省察力
子供	3.66 [3.58]	3.24 [2.63]	3.77 [3.81]	3.85 [3.56]	3.85 [3.93]	3.62 [3.47]
保護者	3.49 [3.51]	3.11 [2.95]	3.62 [3.81]	3.59 [3.17]	3.69 [3.87]	3.50 [3.38]

また、第1回の実施後に振り返りを行い、参加者同士のコミュニケーションがより活発に行われるようにするために、日野氏より、「明確なキーワードを分かりやすく示したり、指導者が繰り返しそれらを実践していったりすることが必要。」との指摘をいただいた。そこで、第2回と第3回では、「ポジティブワード」、「ワクワクサイン」と言うキーワードを挙げ、具体的な方法を紹介したり、指導者自ら繰り返し実践したりした。プログラムの内容が回によって一部違うためそれぞれのプログラムの特性の影響もある程度結果に影響していると考えられるが、下の表3が示すように、第1回と比べて第2回・第3回は事業実施後のコミュニケーション力についての評価が向上していることが分かった。

表3 コミュニケーション力についての回答

第1回（7/23）		第2回（8/6）		第3回（8/20）		第1回と第2・第3回平均の差	
子供	保護者	子供	保護者	子供	保護者	子供	保護者
3.00	2.29	3.21	3.67	3.50	3.53	+0.36	+1.31

16 今後の課題

本事業の目的は、関係機関と連携しながら特色あるプログラムを開発することで、地域から理解・認知され、研修支援や公立青少年教育施設等で活用されることを目指している。今後は、日野氏や他施設との情報交換を進め、研修支援におけるより有効なプログラムの組み合わせや今までの取り組みで得られた有効な指導法などを整理し、研修支援プログラムとして提供するとともに、やり抜く力を高めていくためのよりよいプログラムを普及していきたい。

（担当：主任企画指導専門職 高木 啓吾）